

今年はスポーツ界での不祥事が相次いだ。振り返ってみると、テレビのニュース番組では自然災害とスポーツ界の不祥事の話で溢れかえっていた印象である。日大のタックル事件、体操パワハラ問題、ボクシング会長問題、大相撲協会問題、バスケ買春問題など、常にあらゆる競技の業界において事件が起き、世間を騒がせていた。2020年に東京オリンピックを目前にしておきながら、日本のスポーツ業界の腐敗の様相がどんどん明るみになってゆく結果となってしまった。

これらの問題、バスケ買春問題は性質の違うものだが、それ以外は基本的に、選手によるものではなく、コーチや、管理・運営陣によって招かれた不祥事である事に注目したい。選手達が一生懸命トレーニングをして、試合を重ね、努力しているその裏で、「大人たち」が引き起こしているという構図だ。勿論、コーチや監督がパワハラをしたり不正な指示をする事は、彼らなりに競技に真剣だったが故におかしな方向にってしまったというようにも見れなくはないが、結果として上に立つものがプレイヤー達のスポーツマンシップを踏みにじる形になっている事には変わらない。

これは、日本における現在の政治や、企業の中で起きている事と重なる。恐らく大変似通った心理状態の元に起きていると言える。

通常私たちが将棋をする時に、歩兵や飛車などの駒に感情移入する事はない。まさしく、選手たちはただの駒であり、政治では国民が、企業では社員がそうなのである。これは管理する側にとって、プレイヤーとは全く非現実的な存在として見えているという事になるだろう。しかしリアリティはプレイヤーにこそ存在する事を忘れてはならない。

ヨーロッパの市民社会は、広場を勝ち取った。そしてその広場でスポーツが行われる。ヨーロッパのスポーツ界に不祥事がないかどうかは知らないが、日本のスポーツ界を見直すには、そういった原点に立ち返る事が必要なのではないだろうか。